

伊藤至*: ヒメタデ類小記

Itaru Ito*: Notes on *Persicaria erecto-minor* group of Japan

タデ類の形質は安定性が少く、変異が大きく、一種内の変化範囲、種と種の中間形などについて、以前から難渋していた。たまたま東京大学に、原先生の御指導を仰ぎこの方面的研究調査する好機に恵まれた。この結果若干わかつたことをまとめてみたが、未解決の点も多く、殊に区別点については新事実を見つけることができなかつた。

タデ類では一般によい特徴を示す腺点の有無、果の両凸形、3稜形の別なども必ずしも固定した形質ではなく、大凡の傾向として採用できるというにすぎない。以下ここにまとめた各種は或は大きく、*Persicaria minor* Opiz = *Polygonum minus* Huds. と同一種内に入るかも知れないが、ヨーロッパ、アジア中西部の充分な材料がないので、一応これとは別に取扱うこととした。この研究調査には東大と国立科学博物館の標本を利用した。なお後記の果の長さについては底部から最先端の頂点まで測つたものである。

これをまとめるについて偏に原先生の御指導、御援助を頂いた。謹んで御礼申し上げる。又、本田先生、前川先生にもいろいろ教えを頂き、山崎敬氏その他教室の方々にもお世話になつた。なお科学博物館の大井先生からは種々御高説を賜わり、奥山先生からは御便宜を頂いた。諸先生各位の御懇情に厚く御礼申し上げる。

(始めに取扱つた種の検索表を示すが、これは必ずしも系統関係を示してはいない。)

検索表

I. 花穂は花が疎に、又は断絶してつき、鞭状で円筒状にならず、下部は葉腋生。果は両凸形、褐色～濃褐色

1. 全体小形、高さ 5~30 cm。花穂は頂生、直立.....1 a. マンシュウヌカボタデ
2. 全体やや大形、高さ 30~60 cm。花穂は頂生又は腋生、下垂する
 - i. 花は少し断絶してつき、果は小さく 1.2~1.5 mm1 b. ヤナギヌカボ
 - ii. 花は著しく疎につき、果はやや大きく 1.5~2 mm1 c. サイコクヌカボ

II. 花穂は花が密集してつき、円筒状で直立、葉腋生はない

1. 果は両凸形、濃褐色
 - i. 花穂は細く長円筒状。果は小さく 1~1.3 mm。葉の先漸次鋭尖頭2 a. シマヒメタデ
 - ii. 花穂は太く円筒状。果はやや大きく 1.5~1.7 mm。葉は鋭尖頭2 b. フトボノヌカボタデ
2. 果は 3稜形、多くは黒色
 - i. 花穂は花がやや密集し、頂生のものは単生又は分岐。果は通常 1.5~1.7 mm。葉は通常広線形、下面に盤状腺点がない3 a. ヒメタデ
 - ii. 花穂は花がやや密集し、頂生のものは通常単生、下部の花は離在すること稀、鮮淡紅色花。果は 1.8~2 mm。葉はややだ円状披針形、革質、下面に盤状腺点がある3 b. ホソバイヌタデ

* 千葉県立 山武農業高等学校 Sambu High School, Chiba Pref., Japan.

- iii. 花穂の花は相接してつき、頂生花穂は通常分歧。花は帶緑淡紅色。果は 1.8～2 mm。葉はやや円状披針形、膜質、盤状腺点はない.....3 c. モリイヌタデ
- iv. 花穂の花はやや相接してつき、頂生花穂は通常分歧。果は通常 1.5 mm。葉は線状。大株になる3 d. ホソバヌマタデ

1 a. マンシユウヌカボタデ (*Persicaria foliosa* Kitagawa)

莖は纖細で径 0.5～1 mm, 高さ 30 cm 前後まで。節間は短縮。葉は線形、ごく稀に線状披針形、鋭頭、狭脚、無柄状～短柄, 3～4 cm × 3～4 mm で小形、通常無毛、盤状腺点がない。ごく稀に満鮮産のもので疎に細毛と腺点のものがある。下面はルーベで通常粗渋性、稀に平滑。葉鞘は圧毛があり縁毛は長さ 0.4 (−1) mm。花穂は花が断絶してつき、多数、細く長く、直立稀に下垂、下部は葉腋性。花被は暗紅色、又は帶緑暗紅色で腺点がない。果は褐色、平滑、光沢があり、両凸形、ごく稀に 3 穂形、長さ 1.3～1.8 mm。

ヨーロッパから温帯アジアにかけて広く分布し、東大には次の立派な標本がある。

フィンランド (A. Palmgren, Sep. 1901; Hj. Hjelt, Sep. 7. 1878). スエーデン (G. Samuelsson, Aug. 15, 1912). 满州 (北川政夫, Aug. 31, 1936; V. Komarov, Aug. 5, 1896). 朝鮮 (咸南, 中井猛之進, Aug. 19, 1935).

1b. ヤナギヌカボ (var. *paludicola* Hara)

莖はやや細く径 1～2 mm, 太いもので下部 3 mm, 高さ 30～60 cm, 帯紅色、無毛。葉鞘に圧毛があつて縁毛は短かく目だたない、長いので 1.5～2 (3) mm, まで。葉は線形～線状披針形で細く長く、漸次鋸尖頭、下部は狭脚又は鈍脚、やや無柄、通常 4～8 cm × 4～8 mm, 葉面はやや無毛のものから細毛を布くものまで変化があり、下面はルーベで粗渋、調査の範囲では何れの標本もどれかの葉には常に盤状腺点があつた。下面の主脈上に圧毛があり、側脈不分明。花穂は頂生又は腋生で通常 5～8 (9) cm, やや鞭状でゆるく下垂、花茎の基部葉腋から花がつき、上部は僅かに断絶しながら多くの花をつけ、そのため花茎の部分が明らかでない。往々花穂の下部に 2～3 の小葉をつけることがある。小苞の縁毛は目だたないが稀に長いものは 1～1.5 mm ある。果は両凸形、稀に僅かに 3 穂形を混えることがあり、黒褐色、長さほぼ 1.5 mm。

北海道 (十勝). 本州 陸奥 (青森, N. Kinashi, Sep. 1903, TI—Syntype), 陸前, 岩代, 越後, 常陸 (水戸, 伊藤伊作, Oct. 1911, TI—Syntype), 武藏, 下総 (真間, 牧野富太郎, Oct. 1895, TI—Syntype), 遠江, 山城, 備後, 安芸. 九州 (肥前). 朝鮮 (開城, 張亨斗, Sep. 27, 1942, TNS).

ヤナギヌカボは従来独立種と見なされていたが、原先生はマンシユウヌカボタデの変種に扱つてゐられる。この両者をくらべると、ヤナギヌカボは発育も良好で、全体はより大きなものである。莖はやや太く、葉は長くて腺点や毛の出る度合が強く、花穂はより伸長する。殊に腋生の花穂が頂生のもの同様に伸長することは目だつ点である。マン

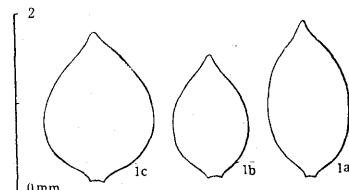


Fig. 1. 1 a マンシユウヌカボタデ *P. foliosa*.
1 b ヤナギヌカボ var. *paludicola*.
1 c サイコクヌカボ var. *Nikaii* の瘦果

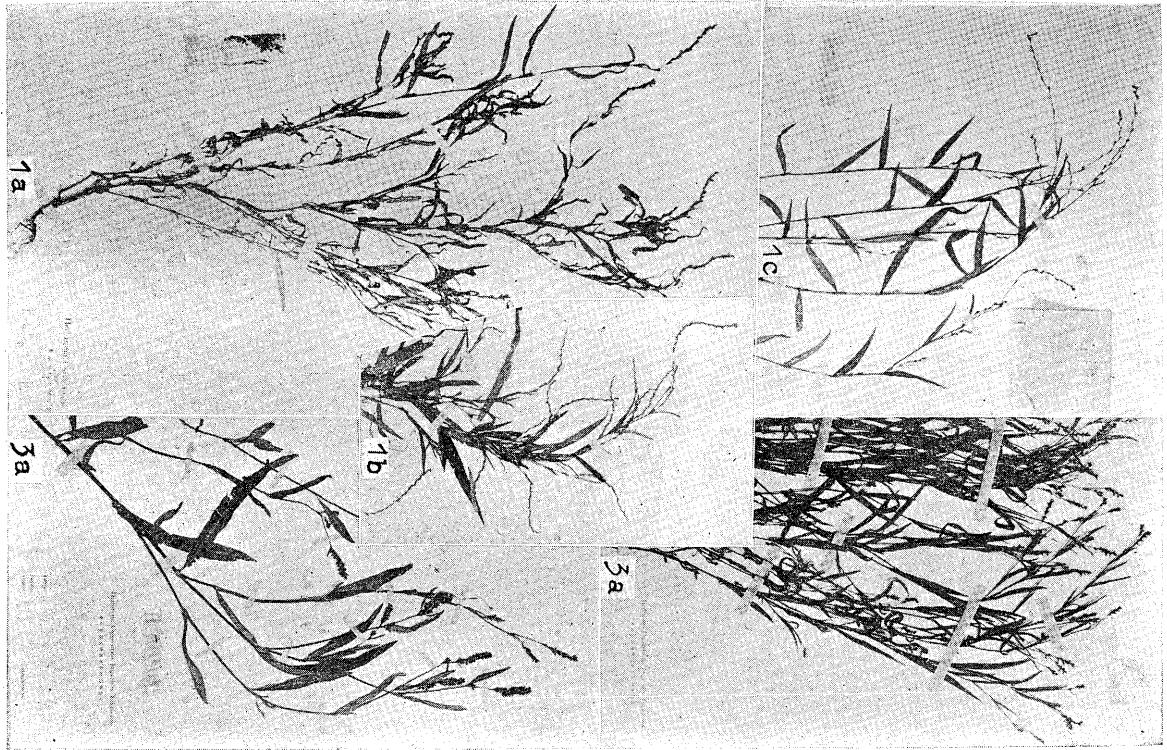


FIG. 2. 1a マンシュウカモツ *Persicaria foliosa*. 1b ヤナギヌカモ var. *paludicola*.
1c サイコクヌカモ var. *Nikau*. 3a ヒメタツ *P. erecto-minor* (ca. $\times 1/5$).

シュウヌカボタデは全体小さく、葉も小形で質も薄い。花穂は頂生の方は伸長するが腋生の方は穂状にはならない。内地産のヤナギヌカボの発育不良品はマンシュウヌカボタデに似てくることや、朝鮮に両者が分布することなど考え合わせ、原先生の変種説に賛成したい。

1c. サイコクヌカボ (var. *Nikaii* Hara)

莖は無毛、帶紅色、多くは径 1.2~1.3 mm。葉鞘は通常 5~6 mm、短剛毛を布き、縁毛は 2~4 mm。葉は狭披針状で漸次銳尖頭、鈍脚~円脚、通常 4~6 cm × 6 mm、下面は無毛のこともあるが上面は常に多少の毛があり、下面主脈は明らかに有毛、往々盤状腺点がある。花は著しく疎に花軸につき、時に一部接続することがあり、多くは花莖の基部に花がある。時に花穂下部に 1~2 の小葉がつく。小苞の縁毛は 1.2~2 mm で著しく、時に短かく目だたない。果は両凸形、稀に僅少の 3 疏形が混在、長さ 1.5~2 mm。

本州 (三河、近江、山城、和泉、紀伊、播磨、備中 (真金村、二階重様、Oct. 26, 1902, TI-Type), 周防). 四国 (讃岐). 九州 (筑前、肥前、豊前、肥後、薩摩、大隅). 支那 (湖南省、南嶽沿道、採集者不詳、1907, TI).

標本では宿存花被が乾いた暗色をおびるが、ヤナギヌカボは白っぽく鈍光沢がある。

2a. シマヒメタデ (*Persicaria Kawagoeana* Nakai)

莖は径 1.5~2 mm、節間 3~8 cm 通常 4 cm 内外。葉鞘は中部で略 0.8~1 cm, 2 (稀に 0.5) mm 前後の粗毛を布き、縁毛は (1) 3~4 mm で目だつ。葉は通常厚いが、時に大層薄く、線状披針形、漸次銳尖頭で長くとがり、鋸脚にならず、短柄又はやや無柄、6~7 (8) cm × 5~8 mm、両面多少の毛があり、下面主脈上に短剛毛を布く。下面是 1 枚の標本**) を除き盤状腺点はない。花穂は花が接続し、細長く直立、通常 2.5~4 cm × 2~3 mm、下部の花は往々離在、花莖はやや細く 1~2 (3) cm あり。小苞の縁毛は通常 1.5 mm 前後でやや目につき、稀に短かい。果は両凸形で著しく小さく 1~1.3 (1.5) mm。

琉球 (宝島、河越重紀、Aug. 25, 1910, TI-Type; TNS-Isotype), 沖縄島 (天野鉄夫、Oct. 18, 1952, TNS; S. Sonohara, Aug. or Sep. 1951, TNS). 台湾 (台北、川上淹弥**、Sep. 17, 1860, TI; 佐々木舜一、Jun. 13, 1917, TI).

牧野博士の原記載に “Achene....., 2 1/2 mm long.” とあるがこれは誤植なのか、基準標本では 1.2~1.3 mm であるので注意を要する。Danser は東インド諸島のタデについて本種を *Polygonum minus* Huds. ssp. *procerum* Danser (1927) の異名に入れているが、そのものは莖も葉も花穂もより大きく、果は 2 mm で大きいので別のものと思う。又、この近縁のもので ssp. *micranthum* Danser (1927) というのは、伏臥性で高さ 30 cm、節間は 2~3 cm、花穂は 3 cm × 2~3 mm、果は 1 mm 以下の、小さいものであつてこれとちがう。

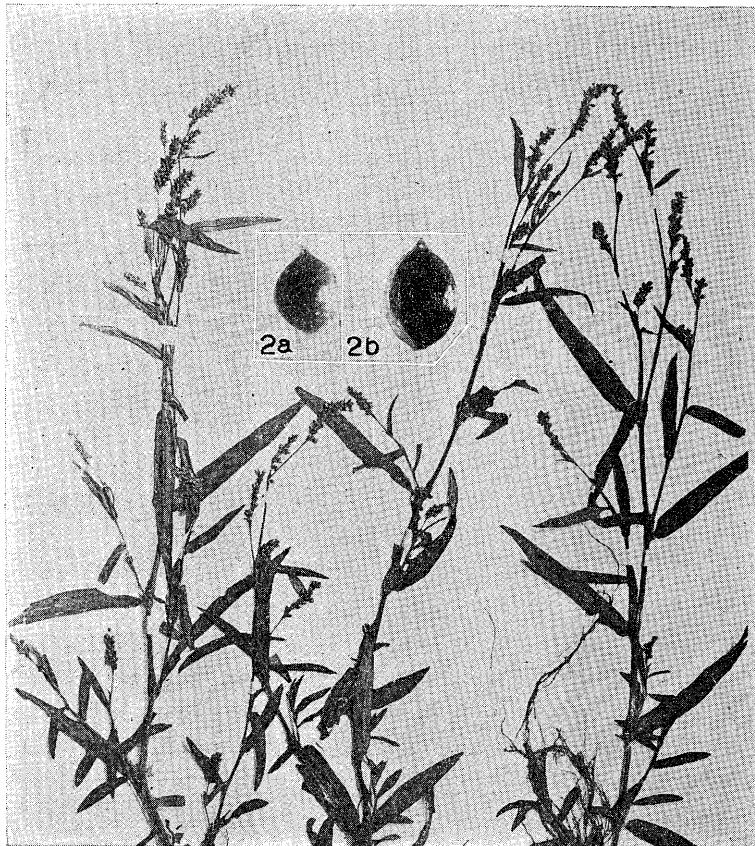
2b. フトボノヌカボタデ (原ラベル上で命名) (var. *densiflora* Hara et I. Ito)

東大では原先生が 10 余年前に気づかれ、学名も和名も手記され別にまとめである。

全体やや硬く、莖は 30~60 cm 無毛、通常帶紅色、径 1 mm 前後、下部 1.5~2 mm

節間 2~3 cm でやや短かい。葉鞘 5~8 mm, 圧毛があり, 縁毛 略 2 (3) mm。葉は通常やや厚く, 広線形~狭披針形, 銳尖頭, 円脚~鈍脚, 葉の最大巾は下部, 両面多少の毛がある。下面通常鱗状腺点^{**})があり, 主脈は明らかに有毛, 側脈不分明。花穂は頂生又は腋生, 花は密集して円筒状で短かく, 大凡 1~2 cm × (3) 4~5 mm, 直立, 花茎は略 1 cm 稀に 3 cm。小苞の縁毛は短かく目だたず, 略 1 mm まで, 稀に 1.3 mm。果は黒褐色, 光沢, 両凸形, 長さ 1.5~1.7 mm。

本州(上総, 八穂, 奥山春季^{**}), Oct. 11, 1936, TNS; 東浪見, 久内清孝^{**}, Nov. 12, 1933, TI; 九州(筑前, 雜餉, 中島一男^{**}), Oct. 13, 1933, TI; 筑後, 羽塚町, 中島, Oct. 10, 1932, TNS; 肥前, 長崎市, 外山三郎^{**}, Sep. 10, 1955, TI; 針尾島, 外山三郎^{**}, Oct. 18, 1942, TNS; 日向, 宮崎市, 吉江清朗^{**}, Oct. 21, 1934, TI—Type; 薩



F. 2. フトボノヌカボタデ *Persicaria Kawagoeana* var. *densiflora*, Type (ca. ×1/2) とその瘦果 (2b, ca. ×10), 及びシマヒメタデ *P. Kawagoeana* の瘦果 (2a, ca. ×10).

摩, 川内町, 士井美夫^{**}, Sep. 24, 1934, TI).

これは莖葉, 果などの形状が, ヤナギヌカボに似た所もあるが, 花穂は常に花が密集して円筒状直立する点が著しくちがう。シマヒメタデに比べて, 全体やや短縮した形で, がつちりした感がある。節間, 葉, 花序などはやや短かく, 花穂も短かく太い点が著しい。果は一まわり大きい。葉の先はやや急尖で, 開出する傾向が強いなどが異なる点である。生育状況によって稀に, 伏臥, 繊細, 小形のものがある。

白花フトボノヌカボタデ (前川ラベル上で命名) (f. *albida* I. Ito)

白花品のものを指し, 標本は花期のもので全体繊細, 花穂細く, 葉に腺点がない。

九州 (肥前, 時津村, 千葉常三郎, Sep. 26, 1938, TI—Type).

3a ヒメタデ (*Persicaria erecto-minor* Nakai).

莖は通常やや細く, 疎に分岐し, 少分葉紅色。葉鞘は通常薄く透明質, 疏に圧毛, 緑毛は長いか又は短かい。葉は線形~線状披針形~広披針形, 鈍頭状微尖~鋸頭~鋸尖頭, 狹脚~円脚, やや無柄, 非常に変化があり, 多くは 6~7 cm × 4~6 (9) mm, 通常薄膜質, 稀にやや草質, 側脈不分明稀にやや明らか, 緑辺と脈を除き無毛, 稀に両面疏に短毛を布く, 下面微隆起点を布くが腺点はない。花穂はやや密花, 直立, 狹円筒状, 下部の花は離在することが多い。頂生花穂は単立, 往々分岐, 花茎は時に毛管状。小苞の緑毛は著しい。花被暗紅色, 往々盤状腺点がある。果は 3 稜形, 長さ 1.5~2 mm。花期は 5~10 月。

本州 (陸前, 下野, 武藏, 相模, 信濃 (浅間山, 矢田部良吉 & 松村任三, Jul. 20, 1880, TI—Type), 大和, 山城, 紀伊). 四国 (伊予, 阿波). 九州 (筑前, 筑後, 豊後, 肥前). 朝鮮 (羅老島, 張亨斗, Jun. 29, 1938, TNS). 滿州 (博克図, 佐藤潤平, Sep. 13, 1928, TI). 支那 (上海, 木村康一, Jul 19, 1932, TI; 浙江省, 張宗緒, TI).

本種は非常に多型で, 葉は線形, 果は小さく, 全体繊細のものと, 葉は広く, 果は大きく, 全体がつちりした両極端品はつい分ちがうように見える (Fig. 2, 3a 参照)。前者は夏秋, 後者は春夏らしく, 両型は連続移行して区別することは難しいと, 原先生も指摘されていられる。

アオヒメタデ (原ラベル上で命名) (f. *viridiflora* I. Ito)

白花品をいう。和名については, 中井博士のアオヤナギヌカボ, 青花ホソバイヌタデの名があるが, 何れも紛わしいので原先生の手記されているアオヒメタデを起用したい。

北海道 (胆振, 中井猛之進, Sep. 30, 1939, TI). 本州 (陸前, 仙台, 飯柴永吉, Sep. 11, 1928, TI—Type; 下野, 富田村, 関本平八, Aug. 17, 1942, TI; 信濃, 浅間山, 久内清孝, Sep. 4, 1921, TI). 九州 (肥前, 大村市, 外山三郎, Jun. 14, 1943, TI & TNS).

3b ホソバイヌタデ (var. *trigonocarpa* Hara).

莖は疏に分枝。葉は狭だ円状披針形, 鋸頭, 鋸脚, 草質, 標本では側脈やや明らか, 稀に上面緑辺に細毛があり, 下面は脈を除いて無毛。微隆起点あり, 盤状腺点は北海道産^{1**}と武藏, 小合溜産^{2**}の 2 枚を除いて常にある。花穂は枝頂に少數, 狹円柱状, 密

花、下部は花は離在すること稀。花被は鮮淡紅色、盤状腺点がある。果は黒色、3稜形、長さ 1.8~2 mm。

北海道(札幌^{*1}, T. Tokubuchi, Aug. 25, 1891, TI)? 本州(羽後、陸前、武藏・東京、松村任三, Sep. 24, 1880, TI—Type; 小合溜^{*2}、大井次三郎, Aug. 17, 1948, TNS; 下総)。

ホソバイヌタデの葉の狭いものと、ヒメタデの葉の広いものは区別がつきにくく、連続移行するようなので、両者の独立種は無理のようである。

3c. モリイヌタデ (var. *roseoviridis* I. Ito)

これは満州産のもので、全体ホソバイヌタデに大層よく似ているものである。原記載は葉鞘は透明質、無毛とあるが、標本では毛のあること多く、又ホソバイヌタデにも葉鞘透明質のものがあつてこの点変らず、花被に腺点があり、果の形、大きさも同じで、同一物と見なされる場合もあるが、次の点がちがうようである。ホソバイヌタデに比べて、花穂、花茎はより伸長し、頂生花穂は通常分枝、下部の花は通常離在、花は帶緑淡紅色、葉は膜質に近いが時にははつきりせず、下面に全く盤状腺点がない。

3d. ホソバヌマタデ (var. *koreensis* I. Ito)

これは満州、朝鮮に産するが、ヒメタデに極めて近いものである。果は 1.5 mm で小さく、黒色で、花被は盤状腺点のある点などは変らず、葉の下面に盤状腺点が出ない点も同じであるが、稀に唯 1 枚の標本で、あるものがある。ヒメタデに比べて、茎は下部から著しく分枝、大株で、葉質もいくらかちがうようで、花穂は花がやや接してつき、より狭長で頂生のものは分枝する点なども異なる。内地のヒメタデ中、叢生の点を除いて全く同じ型がある。詳細については分からないのでこれを変種にしておきたい。満州には花が緑白色で葉は多毛の一型があるが、同じものに属する。ヒメタデ、ホソバイヌタデ、モリイヌタデ、ホソバヌマタデは前記の様にそれぞれ大凡の傾向があつても、截然たるものではなく、この間に移行することなどを考え合わせて、これ等を同一種内に入れた。朝鮮、満州にはヒメタデ、ホソバヌマタデの両方があることも興味がある。

1a. *Persicaria foliosa* (H. Lindberg) Kitagawa in Inst. Sci. Res. Manchouko 1: 321 (1937)—*Polygonum foliosum* H. Lindberg in Meddel. Soc. Faun. et Fl. Fenn. 27: 3 (1900).

Hab. Korea, Manchuria.

1b. var. *paludicola* (Makino) Hara, stat. nov., in sched.—*Polygonum minus* Huds. sensu Makino in Bot. Mag. Tokyo 4: 416 (1890)—*Polygonum paludicolum* Makino in Bot. Mag. Tokyo 28: 113 (1914)—*Persicaria paludicola* (Makino) Nakai in Rigakkai 24: 300 (1926).

Hab. Yezo, Honsyu, Kyushu, Korea.

1c. var. *Nikaii* (Makino) Hara, comb. nov. in sched.—*Polygonum paludicolum* Makino var. *Nikaii* Makino in Bot. Mag. Tokyo 28: 114 (1914)—*Polygonum Nikaii* Makino in Bot. Mag. Tokyo 28: 114 (1914), pro syn.—*Persicaria*

Nikaii (Makino) Nakai in Rigakkai **24**: 300 (1926).

Hab. Honsyu, Shikoku, Kyusyu, China (prov. Hunan, Coll. ? 1907, TI).

2 a. **Persicaria Kawagoeana** (Makino) Nakai in Rigakkai **24**: 300 (1926)

—*Polygonum Kawagoeanum* Makino in Bot. Mag. Tokyo **28**: 115 (1914).

Hab. Lyukyu, Formosa.

2 b. var. **densiflora** Hara et I. Ito, var. nov. —*Persicaria paludicola* Nakai
var. *densiflora* Hara in sched.

Diftert a typo omnibus partibus paullo brevioribus robustioribusque, internodis
brevioribus plerumque 2-3 cm longis, foliis plus minusve patentibus brevioribus
infra vulgo minute discoideo-punctatis, spicis erectis brevioribus crassioribusque
plerumque 1-2 cm longis (3-) 4-5 mm crassis, pedunculis circiter 1 cm (raro ad 3
cm) longis, nucibus 1.5-1.7 mm longis.

Type. Kyusyu, prov. Hyuga : Miyazaki-city (S. Yoshie, Oct. 1, 1934, in Herb.
Univ. Tokyo)

Hab. Honsyu (prov. Kadzusa), Kyusyu (prov. Chikuzen, prov. Chikugo, prov.
Hizen, prov. Hyuga, prov. Satsuma).

form. **albida** (F. Maekawa) I. Ito, f. nov. —*Persicaria paludicola* Nakai var.
densiflora Hara f. *albida* F. Maekawa in sched.

Flores albi; folia subtus eglandigera.

Type. Kyusyu, prov. Hizen : Tokidzumura (T. Chiba, Sept. 26, 1938, in Herb.
Univ. Tokyo).

3 a. **Persicaria erecto-minor** (Makino) Nakai in Rigakkai **24**: 300 (1926) —
Polygonum erecto-minus Makino in Bot. Mag. Tokyo **28**: 110 (1914).

Hab. Honsyu, Shikoku, Kyushu, Korea, Manchuria, China (Shanghai, K.
Kimura, Jul. 19, 1932 TI; Chekiang 張宗緒 TI).

form. **viridiflora** (Nakai) I. Ito, stat. nov. —*Persicaria trigonocarpa* Nakai
var. *viridiflora* Nakai in Bot. Mag. Tokyo **45**: 116 (1931).

Hab. Yezo, Honsyu, Kyushu.

3 b. var. **trigonocarpa** (Makino) Hara, stat. nov. —*Polygonum minus* Huds.
f. *trigonocarpa* Makino in Bot. Mag. Tokyo **28**: 111 (1914) —*Polygonum trigono-*
carpum (Makino) Kudo et Masam. in Ann. Rep. Taihoku Bot. Gard. **2**: 53 (1932)
—*Persicaria trigonocarpa* (Makino) Nakai in Rigakkai **24**: 300 (1926).

Hab. Yezo ?, Honsyu.

3 c. var. **roseoviridis** (Kitagawa) I. Ito, comb. nov. —*Persicaria roseoviridis*
Kitagawa in Inst. Sci. Res. Manchouko **1**: 321 (1937) —*Persicaria trigonocarpa*

Nakai var. *roseoviridis* (Kitagawa) Kitagawa in l. c. 6: 120 (1942).

Hab. Manchuria.

3 d. var. **koreensis** (Nakai) I. Ito, stat. nov.—*Polygonum koreense* Nakai in Bot. Mag. Tokyo 33: 6 (1919)—*Persicaria koreensis* (Nakai) Nakai in Rigakai 24: 300 (1926)—*Persicaria sangareensis* Kitagawa in Journ. Jap. Bot. 19: 62 (1943).

Hab. Korea, Manchuria.

○ヒメヘビイチゴに就て 檜山庫三： Kōzō HIYAMA: On *Potentilla centigrana* Maxim.

Maximowicz が *Potentilla centigrana* を書いた時には之を 2 つの変種に分かつたが、葉の大小とか・鋸歯の具合・萼片と副萼片との形や大きさの関係などに雑然とした変化があつて到底それらによつて型を区別することはできなかったために、M 氏の区別はあまり行われずに来た。が、しかし、M 氏の言及しなかつた毛の性質に 2 通りがあつて、これによつてヒメヘビイチゴに 2 つの型を認めることができる。つまり産地によつて茎や葉柄の毛に開出するものと伏臥するものとの 2 つがある。この毛の多少にはいろいろの程度が見られるが、概していえば立毛型では茎の基から多毛なものが多く、また伏毛型では茎の下部が無毛で中部あたりから先に毛を散生するものが多い。日本には立毛型が多いが、北海道や本州には伏毛型も見られる。*Potentilla centigrana* といふものは記載によると茎は “parce adpresso setulosa” であつて、その基本植物は伏毛型であることが判るのであるが、日本ではじめてヒメヘビイチゴという和名がつけられた当時には毛のことなどは問題にしていなかつたであろうから、ヒメヘビイチゴといふ名は日本の普通品である立毛型の方に残すことは差支えないと思う。そこで伏毛型の方にも和名が欲しくなつてくるが、これにはカラヒメイチゴ（カラヘビイチゴ、カラヒメヘビイチゴ）といふ名が既にある。といふのは、この和名は中井猛之進氏（1914 年）の命名で、はじめ朝鮮・満洲の植物に対して与えられたものであつて（学名には *P. centigrana* var. *mandshurica* が使われた）、私の見た彼地の標品は M 氏のいふようにどれも伏毛品であつたからである。しかし、この名に何か故障でもあるようなら、フシグロヒメヘビイチゴと新称したらよいと思う。初めこの毛のこと気に付いた時に私は M 氏の記載に照して高毛型の方を仮にタチグロヒメヘビイチゴと呼んでおいたのであつたが、これは穩当でないので捨てる。さて、そこで普通のヒメヘビイチゴを新たに一品種 (*Potentilla centigrana* f. *patens* Hiyama) と見て次のように記載しておきたい。

Potentilla centigrana Maxim., in Bull. Acad. Imp. Sci. St.-Pétersb. 19: 163 (1873) cum var.

forma **centigrana**—Nom. Jap. Tō-himehebiichigo, Tō-hebiishigo, Tō-himeichigo.

forma **patens** Hiyama, nov. f.

Caules petiolique patenter pubescentes. Cetera ut in typo.—Nom. Jap. Himehebiichigo.

Hab. Hondo: Shimura, Tokyo, Prov. Musashi (Hiyama—May 14, 1933—typus in herb. Nation. Sci. Mus. Tokyo). (東京都文京区雑司ヶ谷町)